会議は終わらず

安　松　みゆき
（別府大学助教授）

まだ芸術文化学科に関係して四年目を迎えたにすぎない。それでもこの四年間には様々なことがあった。最もこの学科を特徴づけていると思われるのはなにかと問われたら、私は「会議」と答えたい。

大学の専任教員になるにあたり、多くの諸先生方そして指導教授より送られた言葉のなかに「会議は大変だぞ」との一言があった。もちろん、あまり会議にかかわるなという忠告の意味なのだろうが、しかし前任者で現在国学院大学で教えられる宮下先生は、当時別府大学の芸術文化学科では特にその心配はなく、すぐに終るということを話されていた。

着任早々に教授会、そして学科会議が行われたが、事前の言葉通りにすんなりと終った。ところが学科会議はそれからまたすぐに設けられ、その後週単位で頻繁に繰り返されていった。これはおかしい。話しが違うではないか。また毎回会議は長くかかった。午後４時30分からはじまると、終るのは大体午後７時頃で、しかし回数を重ねると午後９時のことが多々あった。近年大学をとりまく状況が大きく変化し、それにともなって大学でも改革の必要性が唱えられ、また国際的な教育の展開も大学の大きな課題となっていた。それらの問題を議題とした会議だった。しかしそうした問題は、差し迫ったこととして多くの大学が抱えていながら、その明確な答えを見出せていない現状を示している。そのようななかで、すぐに妙案などは思いつくはずもない。そのために会議を無駄な時間と受け止めていた。

だが、今から思えば、そうした会議を通して結果を出したことで、会議の意義を感じている。そして、何とかして学科を良くしようと議論を重ねる学科の教員の姿勢には、本来の大学の組織に希求されている教員の姿を見出すことができた。いま国立大学が法人化され、少子化が進むなどの状況のなかで、大学教員の意識改革が求められているが、芸術文化学科からすれば、それは自発的なものなのである。

また芸術文化学科の特徴は、リベラルな姿勢を根本に持っていることである。学科会議では上下関係はほとんどない。たとえば、海のものとも山のものともわからない私のような新入りの意見も、妥当であればすぐに取り入れられた。そして当時学科長だった松本先生は、問題の解決方法を出来るだけ学科教員全員から引き出そうとして問いかけるために、当初は困惑するものの、全員で考えざるをえない状況がつくられた。毎週毎週すぐには答えの出ない会議が続き、無意味さを感じることもあったものの、それがいつ頃からか、問題を解決するための欠くことのできないプロセスと感じられるようになっていた。それはまちがいなく参加教員全員が解決の糸口を真剣に模索していたからだったと思われる。各教員はそれぞれの専門分野があり、決して時間にゆとりがあるわけでない。自らの研究のための時間はわずかしかない。それでも学科の現状を優先しつつ取り組んだのである。

結論はすぐには見出せなかった。そのためにいつ終るともしれない会議は後期に入っても続けられた。しかし最終的に学科は翌年には、ある嬉しい成果を得ることになった。振り返ってなにが解決策だったのかは、膨大な時間に比例した膨大な内容のために、どれと特定することはできない。ただし、そうした会議の議論のなかで一貫していたのは、学生を優先にした大学の運営を前提に考えていたことだったように思われる。おそらくそれが解決の糸口のひとつになったのであろう。

大学の会議はときに無意味な権力党争の場になり、決まることすら決まらない場合があると聞く。しかし、芸術文化学科ではそれはあり得ない。なぜならば、芸術文化学科は自らの置かれた立場を熟知し、学生と大学のあり方を自発的に考える教員の集団だからである。そしてリベラルで客観的な姿勢を持っていることも付け加えたい。今後も新しいコースをはじめ、議論すべきことは山積みしている。それゆえにできるだけ合理的に会議をすすめ、会議時間の短縮は最低限望まれるところである。しかし、プロセスを重視するならば、会議は終わらないにちがいない。